

稲・大豆作情報（NO. 4）

Ⅰ. 水稻作況情報田の生育概況（7月23日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	葉色 SPAD	
夢しずく 上峰町	6/7 15.8株/㎡	本 年 平 年 平年比	80.4 78.0 (103)	310 332 (93)	11.4 11.0 (+0.4)	41.1 40.6 (+0.5)	移植後は高温が続き、6月27日の梅雨明け以降、平年より高温・多照で経過している。 ○草丈は「夢しずく」で平年よりやや高く、「ヒヨクモチ」で平年より低い。 ○茎数は、「夢しずく」「ヒヨクモチ」で平年より少ない。 ○葉齢から見た生育の早遅は、「夢しずく」で平年よりやや進んでおり、「ヒヨクモチ」で平年並み。
ヒヨクモチ 千代田町	6/20 16.0株/㎡	本 年 平 年 平年比	42.0 45.3 (93)	534 624 (86)	10.8 10.8 (±0)	42.1 40.8 (+1.3)	
ひなたまる 千代田町	6/20 17.6株/㎡	本 年 平 年 平年比	60.4 - -	404 - -	10.6 - -	44.4	

注1) 各品種 前作：麦

注2) 施肥及び病虫害防除は地区基準に準ずる

注3) 平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値

注4) 「さがびより」は本年は情報田を設置しておらず、以下の農業試験研究センター米づくり情報を参考としてください。

注5) ひなたまるはR7年から作付けのため、本年のみの記載になります。

◆農業試験研究センター米づくり情報4号 7月23日（抜粋）

移植日	項目 品種	年 次	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または前年との比較)
6月18日	夢しずく	本 年	64.2	361	10.5	40.3	【気象】 7月16日～22日まで ◆平均気温…1.5℃高い ◆日照時間…長い (平年比 124%) ◆降水量…少ない (平年比 45%) 【生育】 ◆草丈 「ヒノヒカリ」は平年並み、その他の品種は高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」で少なく、その他の品種は多い。 ◆葉齢 「夢しずく」は平年並み、「ヒノヒカリ」「さがびより」、「ヒヨクモチ」はやや進んでいる、「ひなたまる」は進んでいる。 ◆葉色(SPAD 値) 「夢しずく」はやや濃く、その他の品種は平年並み。
		平 年	59.8	406	10.4	39.2	
		平年比(差)	107	89	(+0.1)	(+1.1)	
	ヒノヒカリ	本 年	54.5	480	11.0	41.0	
		平 年	53.8	558	10.5	41.3	
	平年比(差)	101	86	(+0.5)	(-0.3)		
ひなたまる	本 年	62.7	459	11.3	44.2		
	前 年	57.5	275	10.7	43.9		
	前年比(差)	109	167	(+0.6)	(+0.3)		
6月20日	さがびより	本 年	55.1	537	10.8	41.1	
		平 年	49.7	502	10.4	41.2	
		平年比(差)	111	107	(+0.4)	(-0.1)	
	ヒヨクモチ	本 年	55.3	892	11.4	42.7	
		平 年	47.9	816	11.0	43.1	
		平年比(差)	115	109	(+0.4)	(-0.4)	
留意点	○「夢しずく」は幼穂形成期(平年7月28日)までには中干しを終了し、穂肥診断に基づき追肥を施用する。その後は間断灌水に切り替える。 ○必要な茎数が確保された「ひなたまる」「ヒノヒカリ」「さがびより」「ヒヨクモチ」等の中晩生品種は、速やかに中干しを実施する。 ○茎数が少ない圃場は浅水・間断灌水管理により、茎数の確保に努める。その際の中干しは時期を遅らせ、やや軽めにとどめる。						

※耕種概要等は前号参照。

2. 水稻における今後の管理

○水管理

「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」（5月下旬～6月上旬移植）は、幼穂形成期を迎えており、普通期の「夢しずく」（6月中旬移植）は、まもなく幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂ばらみ期まで「間断冠水（2日湛水3日落水）」を実施する。その後、穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「天使の詩」、「ヒヨクモチ」

- ・分げつ数確保のため、引き続き浅水管理、間断灌水を徹底する。
- ・1株当たり茎数20本以上が確保できた圃場から、中干しを実施する。
- ・中干しは土に軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度とし、中干し後は間断灌水を行う。

※茎数が不足している圃場及び弱小分げつの多い圃場では、軽めの中干しを実施する。



6/7 移植「夢しずく」幼穂4.4mm

- ・1株あたり茎数が20本以上確保できた圃場は、下の表1を参考に「中干し」を実施する。

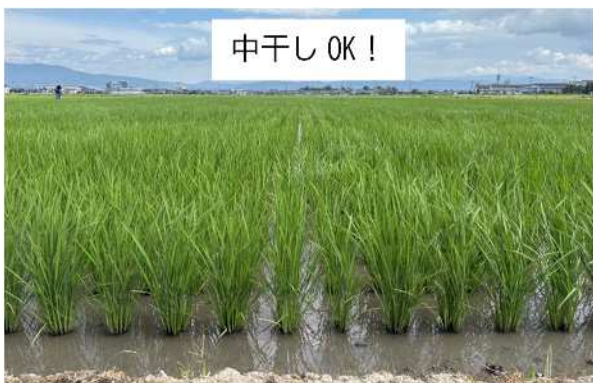
表1 品種別の中干し時期

品種	目標穂数 本/㎡	有効茎数(中干し時期)		
		50株/坪(15.2株/㎡)	60株/坪(18.2株/㎡)	70株/坪(18.2株/㎡)
夢しずく	360	24本/株	20本/株	—
コシヒカリ	370	24本/株	20本/株	—
ひなたまる	340	—	19本/株	16本/株
さがびより	370	24本/株	20本/株	—
ヒヨクモチ	440	25本/株	24本/株	—

注1) 茎数が20本/株以上確保できていない圃場では、分げつ確保のため、浅水管理を基本とする。

注2) 幼穂形成期は、「ひなたまる」、「ヒノヒカリ」、「さがびより」で8月上旬頃、「ヒヨクモチ」で8月中旬頃となるため、8月上旬までは中干しを終える。

○生育状況(中干し時期の圃場のようす ～写真を参考に中干し時期を決定する～)



○雑草防除

- ・除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場などでは、放置するとヒエや広葉雑草が繁茂し、薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、ヒエや広葉雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー I 粒剤	移植後 7 日～バ ¹ エ 4L 但し、収穫 30 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
	クリンチャー EW	移植後 20 日～バ ¹ エ 6L 但し、収穫 30 日前まで	落水散布。展着剤加用。
	ヒエクリーン I 粒剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 4L 但し、収穫 45 日前まで	湛水散布（3～4 日は湛水）
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 60 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低3日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後 15 日～55 日 但し収穫 50 日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 5L 但し収穫 50 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低3日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。（展着剤無加用）
	フォローアップ I 粒剤	移植後 15 日～バ ¹ エ 5L （稲 4 葉期以降） 但し、収穫 60 日前まで	湛水散布（3～5 日は湛水）
	ワイドアタック SC	移植後 20 日～バ ¹ エ 6L （稲 5 葉期以降） 但し、収穫 30 日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。（展着剤無加用）
	ロイアント乳剤	移植後 20 日～バ ¹ エ 5L 但し、収穫 45 日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○穂肥（「夢しずく」）

- ・早植えの夢しずく（5月下旬～6月上旬移植）では、穂肥施用時期に達している（幼穂長 1～5 mm 程度）。
- ・普通期の夢しずく（6月中旬移植）では、間もなく幼穂形成期を迎える。
- ・幼穂形成期を迎えた圃場は中干しを終え、穂肥施用時は湛水し、その後地固めと根に空気を送るため、穂ばらみ期まで「間断冠水（2 日湛水 3 日落水）」を実施する。なお、施用時期が遅れないように表 1 の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長の確認）に基づき、穂肥を施用する。
- ・いもち病が発生している圃場は、穂肥施用によりいもち病の発生を助長する可能性があるため、施用にあたっては十分注意する。

表 1. 「夢しずく」穂肥診断基準

幼穂形成始期の 草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	3.0以下	34以下	20～22日	1 mm	3.0	20.0
	3.0～3.5	34～38	18～20日	2 mm	3.0	20.0
	3.5～3.8	38～39	15～14日	10-15mm	1.6	10.0
	3.8以上	40以上	晩限は止葉抽出終了まで		1.0以下	6.0
73～79cm	3.0～3.5	34～38	18～20日	2 mm	1.6	10.0
	3.5～3.8	38～39	14～15日	10-15mm	1.0	6.0
	3.8以上	40以上	施 用 し な い			
80cm以上	原則として施用しない					

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期（1 mm）を基点に、前後 1 日あたり 1 cm 増減する。

※出穂前 15 日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない

○中間追肥 ～ヒノヒカリ、ヒヨクモチ～

- ・元肥に即効性の肥料（BB480 等）を使用した場合は次の通り。
「ヒノヒカリ」：7/5～10 頃、窒素成分で 2.0 kg/10a（BB480：15kg/10a）程度
「ヒヨクモチ」：7/15 頃、窒素成分で 1.6～2.1 kg/10a（BB480：12～15kg/10a）程度

○病害虫情報（発生および防除）

- ・セジロウンカとトビイロウンカは6月16日～23日に飛来が確認されている。
- ・コブノメイガは6月16日頃から飛来が確認されている。
- ・今後、飛来があった場合は、それぞれの地区・品種別に発生状況を確認し、防除時期の判断・適期防除に努める。
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

佐賀県 農業技術防除センター



トビイロウンカ防除適期
1回目 8/5～8/11
2回目 9/4～9/10



コブノメイガ防除適期
1回目 8/4～8/13
2回目 9/8～9/18

図 トビイロウンカ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）
1. 6月16日頃、6月22日～23日（図では6月23日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月18日以後は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

図 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）
1. 6月16日頃、6月24日～25日（図では25日）の飛来虫を起点とし、コブノメイガの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月18日以後は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 13℃、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

【第1版からの変更点】				
発生時期	予測時期	変更点	第1版	第2版
6月16日 飛来	第1世代幼虫	—	7/1-7/14	7/1-7/14
	第2世代幼虫	早期化(約1日)	7/30-8/12	7/29-8/11
	第3世代幼虫	早期化(約1日)	8/29-9/11	8/28-9/10
	第4世代幼虫	早期化(約1日)	9/30-10/23	9/29-10/21
6月23日 飛来	第1世代幼虫	早期化(約1日)	7/9-21	7/8-21
	第2世代幼虫	早期化(約1日)	8/6-20	8/5-19
	第3世代幼虫	早期化(約1日)	9/5-19	9/4-18

【第1版からの変更点】				
発生時期	予測時期	変更点	第1版	第2版
6月16日 飛来	第1世代幼虫	—	6/24-7/12	6/24-7/12
	第2世代幼虫	早期化(約1日)	7/27-8/14	7/26-8/13
	第3世代幼虫	早期化(約1日)	8/29-9/18	8/28-9/17
	第4世代幼虫	早期化(約1日)	9/30-10/23	9/29-10/21
6月23日 飛来	第1世代幼虫	早期化(約1日)	7/3-21	7/3-20
	第2世代幼虫	早期化(約1日)	8/5-8/23	8/4-8/22
	第3世代幼虫	早期化(約1日)	9/8-29	9/7-28

・県内のイネカメムシの発生状況

イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種です。昨年、本県において広く分布していることが確認されています。本種は、水稻の出穂始めに籾を吸汁して不稔にし、大きな減収被害を生じさせます。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となります。

（防除対策）

- 1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周辺より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。
- 2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の薬剤散布を実施する。



イネカメムシの
成虫（左）及び幼虫（右）

3.大豆における今後の管理

Ⅰ 大豆の生育状況

- ・ 本年は梅雨明けが早く、播種作業も順調に進み 7/24 現在で大部分の播種は終了している。
- ・ 7月上旬に播種した圃場では、3～4 葉期となっている。



写真1 生育状況（7/23撮影 7月3日播種）



写真2 生育状況（7/23撮影 7月12日播種）

- ・ 気象予報を見ると今後も晴天が続く予報となっているため、今後、播種作業を行う圃場では、圃場が耕起可能な状態になれば直ちに播種できるよう準備を行う。

参考）週間天気予報（佐賀県：7月23日7時時点 佐賀地方气象台より）

24日(木)	25日(金)	26日(土)	27日(日)	28日(月)	29日(火)	30日(水)
晴時々曇 	晴時々曇 	曇時々晴 	曇時々晴 	曇時々晴 	晴時々曇 	晴時々曇

2 播種

- ・ 大豆の播種適期は7月上中旬であるが、それ以降の播種は生育量の確保が難しくなるため、播種機を設定し栽植密度等を調整する必要がある。

播種時期 (月/日)	栽植本数 (㎡当り)	栽植様式(例) (条数)条間×株間×1株本数	播種量 (/10a)	窒素施肥量 (/10a)
7/16～7/25 ※3条は7/20以降	18本 20本	(2条)75cm×15cm×2本 (3条)50cm×20cm×2本	5～6kg	—
7/26～7/31	24本 27本	(2条)75cm×11cm×2本 (3条)50cm×15cm×2本	7～8kg	4～6kg

- ・ 不安定な気象条件下で、大豆の安定・多収を目指すため、

- ① 適度な土壌水分確保と播種時期に応じた播種様式の調整＝「発芽・苗立ちの確保」
- ② 生育期間中の適正な土壌水分の保持＝「着莢数の確保、粒肥大」「適切な雑草防除」が重要

3 播種における主な留意点

- ・土中での種子の腐敗リスクを軽減するために、種子消毒（クルザーMAXX、キヒゲン R2 フロアブル）等を徹底し、発芽率向上に努める。

4 干ばつ対策について（梅雨明け後、降雨が見込めない状況の場合）

1) 播種前対策

晴天が続き高温乾燥が予測される場合、コルゲート管の閉栓が土壤水分確保に有効である。



2) 播種後対策（大豆を播種したものの、1週間程度経過しても出芽していない場合）

（1）播種後、7日程度経過した圃場では、土中の種子を掘り返し、種子の状態を確認する。

- ① 土中で出芽後に乾燥している場合、出芽しない可能性が高いため、再播種の必要がある。
- ② 播種時と変わらない種子の状態で、降雨が期待できない場合、うね間灌水（注1）を検討する。

注1：うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったらすぐに落水し、少なくとも翌朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易い。

（2）播種してから間もない圃場で、播種深度が想定より浅く種子周辺の土壤が乾燥している場合、梅雨明け後は高温・乾燥が続くため、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。

注2：うね間灌水後は雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。



写真 大豆での畝間灌水の状況（R6.8月）

【畝間灌水のポイント】

圃場が白乾しひび割れした状態になる前に灌水を行うようにする。

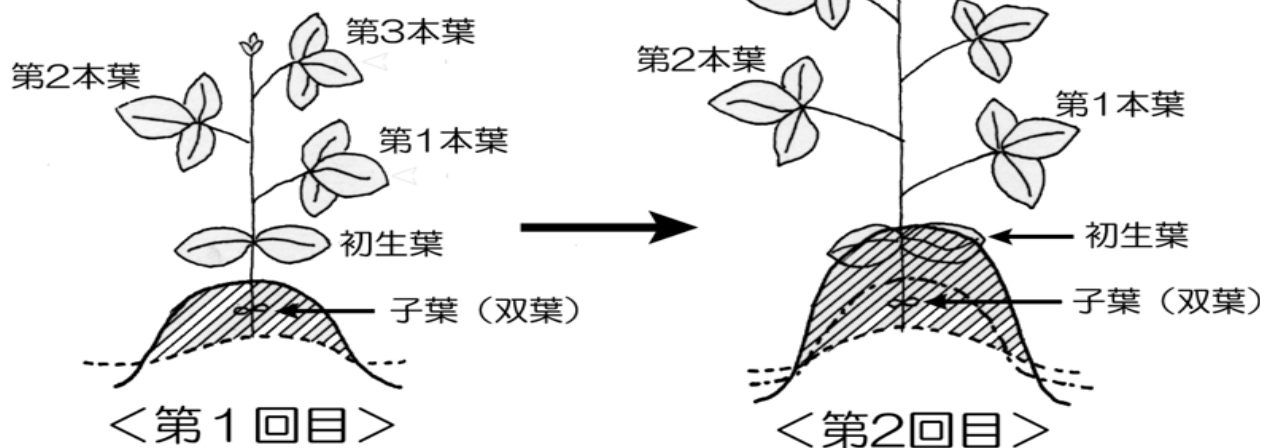
（過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。）

5 中耕・培土の実施

- ・7月上旬播種：7月下旬には1回目の培土時期を迎える。本葉が3枚開いているのを確認したら子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行う。

特に、降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

◎培土の目安



【 高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点 】

1. 開花期近くの中耕・培土・・・✕
うね間に張り出した根が多く、大豆へのダメージが大きい。
2. 日中、高温時の作業・・・✕
断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。
3. 株元まで土がかかっていない・・・✕
培土の目的：不定根の発生 → 根粒菌の活性化、倒伏軽減

中耕・培土は、1回目を3葉期頃、
2回目を5葉期頃に実施する。
2回目は、株元（子葉の下）まで土
がしっかりかかるように実施する。



6 雑草防除

1) 播種後対策

播種直後に土壌処理剤を散布し、雑草防除を行う。特に、近年問題となっているホオズキの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「フルミオ WGD」、アサガオの発生が多い圃場では、「ラクサー乳剤」「サターンバアロ乳剤」との混用が効果的である。

土壌処理除草剤の効果を高めるため、砕土・整地を丁寧に行い、播種後の鎮圧を必ず実施する。液剤の場合は、使用基準内で、多めの散布水量で散布する。

なお、播種直後の散布でも隣接圃場の水稻へドリフト防止のため風速と風向きに注意し、風が強い日には散布しない。

2) 難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類の難防除雑草の発生が多い地域では、圃場内侵入防止に努め、見つけ次第手で抜き取る。

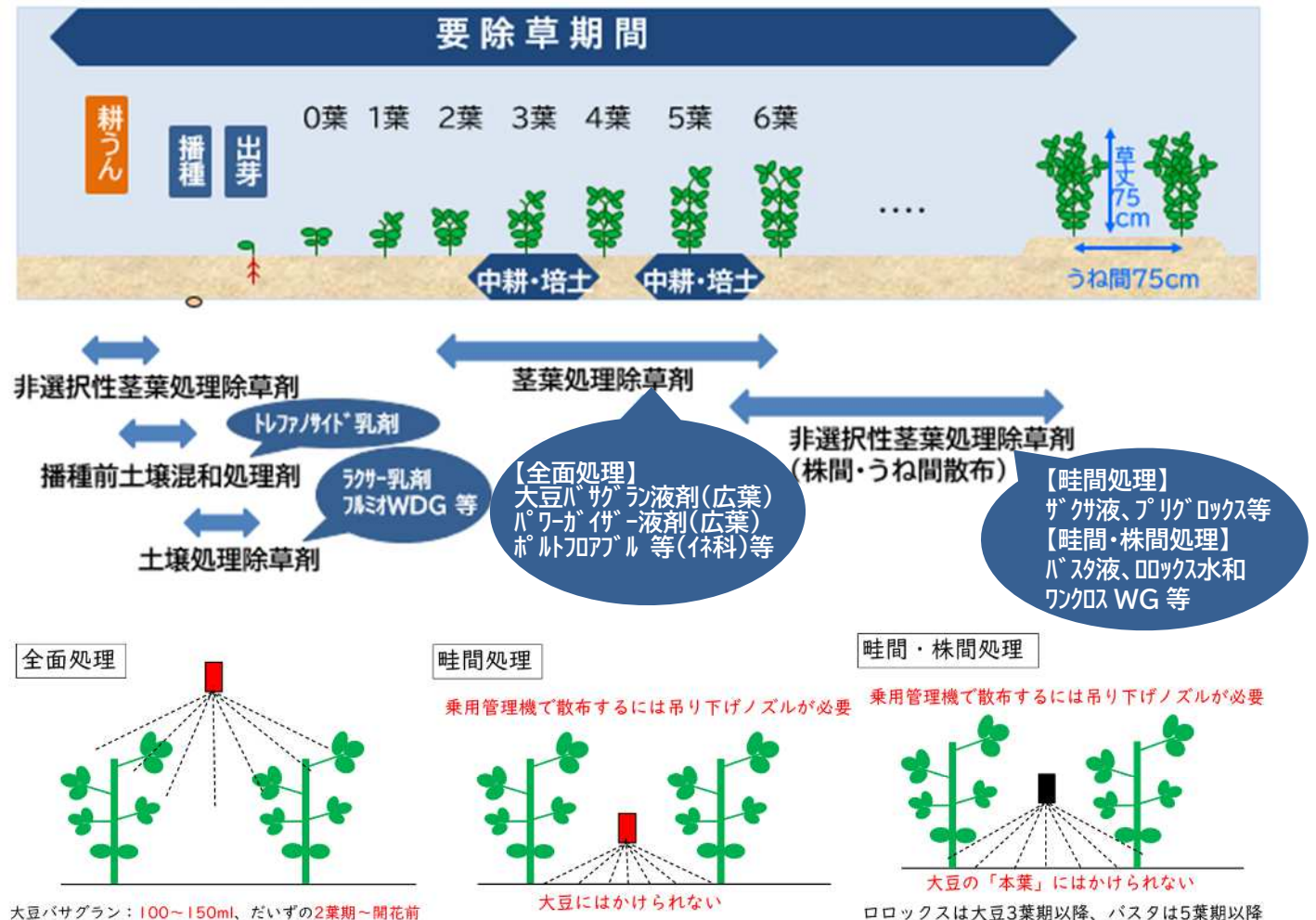
圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。

ツユクサ類（近年、特にカロライナツユクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックスL」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

3) 大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

■除草技術と実施時期の目安



令和7年産 水稻生育期間気象グラフ

(アメダス観測地点：佐賀, データ更新日：7月23日)

三神農業振興センター

